

平成30年度富山大学 教養教育院FD2018報告書

テーマ

教養教育院の今後のあり方を考える

平成30年12月26日（水）

教養教育院

教養教育院教育改善検討
ワーキンググループ

目 次

| | |
|---|----|
| 1. 教養教育院FD2018開催要項 | 1 |
| 2. 開催趣旨 | 2 |
| 3. 「教養教育院FD2018」参加教員名簿 | 3 |
| 4. 「教養教育院FD2018」参加状況 | 5 |
| 5. 第1部：取り組むべき課題 | 7 |
| ① 「学士課程教育の質を保証する学修支援の取組」についての 他大学での取り組みの紹介 | 9 |
| ② 成績評価の厳格化 | 19 |
| 6. 第2部：講義における問題点の抽出 | 29 |
| Aグループ：理系基盤教育の選択科目の現状と今後の課題 | 31 |
| Bグループ：外国語の現状と今後の課題 | 33 |
| Cグループ：多人数講義の現状と今後の課題 | 34 |
| 7. 第3部：今後の教養教育院のあり方：期待と要望 | 35 |
| ① 全学の教育推進における教養教育院への期待 | 35 |
| ② 学部教務委員会からの意見および全体討論 | 37 |
| 8. 教養教育院FD2018アンケート | 39 |
| 教養教育院FD2018アンケート結果 | 41 |

教養教育院FD2018

テーマ：「教養教育院の今後のあり方を考える」

研 修 内 容

1. 開催日時：平成30年12月26日（水） 9：00～12：00
2. 場 所：富山大学共通教育棟教室 A21番教室 他
- 3 日 程
 - (1) 開会・オリエンテーション 9：00～ 9：05
 - ・ 開会のあいさつ 鳥海清司（教養教育院副院長）
 - ・ 日程説明 谷井一郎（教養教育院教育改善検討WG座長）
 - (2) 第1部：取り組むべき課題 9：05～ 9：50
 - ① 「学士課程教育の質を保証する学修支援の取組」についての他大学での取り組みの紹介
講師：谷井一郎（教養教育院・教授）
 - ② 成績評価の厳格化
講師：寺林忠男（学務部・学務課長）
 - ③ 全体討論
 - (3) 第2部：講義における問題点の抽出 9：50～11：00
 - ① グループ討議
 - Aグループ：理系基盤教育の選択科目の現状と今後の課題（A22番教室）
ファシリテーター：杉森保（教養教育院）
 - Bグループ：外国語の現状と今後の課題（A22番教室）
ファシリテーター：福田翔（教養教育院）
 - Cグループ：多人数講義の現状と今後の課題（A23番教室）
ファシリテーター：谷口美樹（教養教育院）
 - ② グループ発表（各グループ5分）
 - ③ 全体討論
 - - - 休憩（11：00～11：10） - - -
 - (4) まとめ：今後の教養教育院のあり方 11：10～11：45
 - ① 全学の教育推進における教養教育院への期待
講師：橋本勝（教育推進センター・教授）
 - ② 学部教務委員会からの意見
 - ③ 全体討論
 - (5) 閉会 11：45～12：00
閉会のあいさつ 谷井一郎（教養教育院教育改善検討WG座長）

開催趣旨

少子高齢化を迎え、社会から求められる大学の役割も変化しています。研究に関しては変わらず成果を求められていますが、大きく変わったのは教育です。大学でしっかり教育を行って社会に送り出してほしいという、つまり教育の質の保証が求められています。私たち教員が学生時代の頃は、学生は放任されていたように思います。しかし社会状況が変わった今、大学に求められているのは、大学の教育によって学生はどこまでできるようになったかを明確に示すことです。そのため大学教員はもっと学生に手をかけなければいけないということです。

本FDの第一部の最初のテーマである「学習支援」は、大学はどこまで学生の教育に手をかけるべきか、他大学の例を紹介します。教育の質の保証のためには、成績評価を厳格にすることも必要であると言われていています。第一部の2番目のテーマは、成績評価の厳格化に関して、その背景となる文部科学省から求められていることを寺林学務課長から説明してもらいます。学生に対しては、自ら調べて学ぶアクティブラーニングを行うことや、授業外学修時間を増やすことも重視されています。このような教育改革を大学として取り組むことを要求されている一方で、多くの教員はなかなか現状のスタイルを変えられないのではないのでしょうか。まず、教員の意識改革が進まなければ、教育の質の保証・大学の教育改革はできません。本日のFDは、そのような問題意識の中から企画されたものです。後半は、講義担当者間での講義における問題点を共有し、その解決に向けて話し合います。最後に、学部の教員との意思疎通の場を設けた次第です。教養教育院がこれから向かうべき方向については、このような場で議論し、学部との連携も模索しながら、富山大学全体の教育がどうあるべきかを考えることのできる組織へと成熟していくことを念願しています。

教養教育院改善検討WG座長
谷 井 一 郎

「教養教育院 F D 2 0 1 8」参加状況

| 所 属 部 局 等 | 参加人数 |
|----------------------|------|
| 教養教育院 | 18 |
| 人文学部 | 1 |
| 人間発達科学部 教職実践開発研究科 | 3 |
| 経済学部 | 3 |
| 理学部 | 3 |
| 医学部 | 1 |
| 工学部 | 5 |
| 都市デザイン学部 | 4 |
| 教育推進センター | 1 |
| 総合情報基盤センター | 1 |
| 研究推進機構 産学連携推進センター | 1 |
| 環境安全推進センター | 1 |
| 総合情報基盤センター | 1 |
| 学生 | 1 |
| 事務職員他 | 14 |
| | 58 |

第1部：取り組むべき課題

- ① 「学士課程教育の質を保証する学修支援の取組」
についての他大学での取り組みの紹介

講師：谷 井 一郎（教養教育院・教授）

- ② 成績評価の厳格化

講師：寺 林 忠 男（学務部・学務課長）

講演資料は次ページ以降に

教養教育院FD2018

テーマ「教養教育院の今後のあり方を考える」

プログラム

第1部: 取り組むべき課題

学士課程教育の質を保証する学習支援の
他大学の取り組みの紹介

教養教育院 谷井 一郎

1

学士課程の中での学習支援の位置づけ

- ① 学士課程を通じた分野横断的な最低限の共通性
- ② 大学卒業までに学生が最低限身につけなければならない能力

(中教審答申『学士課程教育の構築に向けて』, 2008)

①②を修得したものが「学士力」を有する学生



学習成果と一体化した出口管理の明確化

教育課程再構成, スタンドの設定
学修成果の測定・評価方法の捻出

質保証

学士力の涵養を妨げる要因 → 学生の学力レベルの低下

これを解決するための可能性として「学習支援」はある

2

学習支援の枠組み

〈教育プログラム〉

入学前教育, リメディアル教育, 初年次教育

〈教育サービス〉

学習支援センター, ラーニングコモンズ,
障がい学生支援, キャリア支援

〈方法論: アクティブラーニング等〉

協同・協調学習, eラーニング,
学生サポート(ピアチューター, ピアサポート)

3

個別事例

1. 北海道大学
ラーニングサポート室による学習支援
2. 山梨大学
全学プレイスメントテストと共通教育基盤教材の活用
3. 名古屋大学
アカデミック・スキルズ・ガイド
4. 愛媛大学
スタディ・ヘルプ・デスクと成績不振学生への対応

4

個別事例1:北海道大学 ラーニングサポート室による学習支援



スタッフとチューターによる個別学習相談

スタッフ

特定の専門職員(4名)
いずれも博士号取得者

チューター

大学院生(15名)
スタッフによる面談を経て
TA研修会にて研修

利用状況

H30年度1学期間で
延べ1878人
実利用人数470人

5

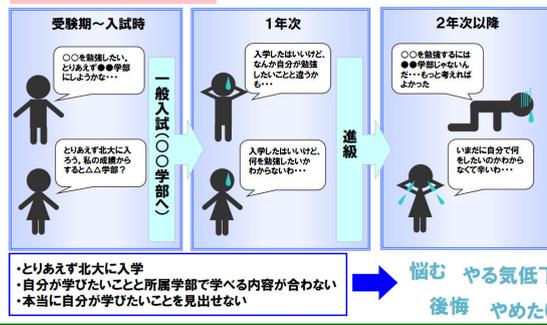
北海道大学の総合入試

「入学後に自分の専門や所属する学部を決める」

まず文系または理系の総合入試枠で受験し、本人の希望と1年次の成績によって学部に移行できるシステム

未成熟な学部・学科選択によるミスマッチの解消(1)

受験期に「学部」を決める方式



6

サポートのガイドライン

例えば次のような質問・相談が多く寄せられています。

- 授業内容で分からないことがあったので教えて欲しい
- 教科書の記述や演習問題で分からない箇所があるので教えて欲しい
- レポートの書き方、レポート課題の意味、解き方が分からない
- 進みたい分野があるが、どのような勉強をしたら良いかアドバイスが欲しい
- 大学院生の先輩に話を聞いて欲しい

主な対応科目は次の通りです。

- 数学（線形代数学，微分積分学）
- 物理学，化学，生物学，地球惑星科学
- 英語，統計学
- 自然科学実験レポート
- 論説型レポート（小論文に近い講義レポート）

- 教員の意図や授業方針に沿った助言や解説を行う
- 学生自身による問題解決を目指す
- 解答自体提示することは避け、考え方や確認方法を助言するに留める

7

2017年度 後期 アカデミックスキルセミナー スタディ・スキルセミナー

プレゼンの方法、レポートの書き方、文献の探し方を伝授!!

■ テーマ(各テーマとも同じ内容で複数回開催します)

レポートの書き方 論説編&実験編

論説型レポート・実験レポートそれぞれについて、書き方の基本や要点を解説します。

講師：ラーニングサポート室スタッフ

プレゼンの方法

伝えるプレゼンをするために、話し方のコツやスライド作りの基本を解説します。



文献の探し方

レポート作成に必須の、北大における本・論文の探し方をレクチャーします。

※一般教養実習内で実施している「図書館情報入門」と同内容です。詳細は館下部URL先をご確認ください。

講師：図書館スタッフ

開催場所

※予約不要。直接こちらへお越しください。

北図書館西棟2階・セミナールーム

日程(昼12:15-12:45, 夕18:15-18:45)

| 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|---|------------------|-----------------|------------------|------------------|
| 2 | 10/3 | 4 | 5 | 6 |
| | 昼 論説型 レポート | 夕 文献の 探し方 | 昼 実験 レポート | 夕 プレゼン の方法 |
| | | 昼 実験 レポート | 夕 文献の 探し方 | 昼 論説型 レポート |
| | | | 夕 プレゼン の方法 | |

計16回開催で
計520人の参加
(H30年度1学期)

8

個別事例2:山梨大学

山梨大学の問題認識

- 低い学習意欲・習慣・態度の学生が入学
- 基礎学力不足の学生が入学
- 大学・学部・学科をなんとなく選んだ学生が入学



基礎学力不足の学生が入学すると
4年間では卒業できない

高大接続システム構築に向けての取り組みとして
プレイメントテストの実施
共通教育基盤教材の利用

9



プレイメントテストの概要

- 学士力の基礎を数学，英語，日本語，情報の4科目と規定。これに学修感アンケートを加えたプレイメントテスト（以下Pテスト）を実施（マークシートを利用）

H27年

- 入学生全員が対象
- 基本は4月1日に一斉実施
- 一部は授業内で実施

H28年以降

- 英語，数学，日本語を学内で一斉に実施
- 情報と学修感は事前配布の上，Pテスト実施日に回収

2018.9.10

H30全国大学教育センター等協議会・山梨大学における学業支援の事例

15

10

習熟度別クラス編成の例(英語, 数学)

英語初級 8クラス
英語中級 11クラス
英語上級 6クラス

数学では習熟度に応じて授業数を変える

| Aクラス | Bクラス | Cクラス | Dクラス |
|------|------|-------|------|
| 週1回 | 週1回 | 一部週2回 | 週2回 |

到達目標はレベルやクラスによらず共通とする

11



共通基盤教育システムsolomon

<https://solomon.ucla.cloud/>

大学間連携共同教育推進事業

共通基盤教育システム

大学ユニオン協議会(千葉科学技術大学, 山梨大学, 愛媛大学, 徳島大学, 山梨学院大学, 駒澤大学, 愛知大学, 福の宮保健福祉大学)

- 標準数学コースには, 中学1年生から高校3年生で学習する数学の, 全ての単元が含まれる
 - 各単元には教科書, 演習問題, テストが含まれる
 - 三角関数, 指数関数と対数関数, 微分と積分, 関数の極限, 微分法, 積分法の学習を指示(
 - 取り組み時間と進捗率を微分積分学Iの単位取得条件に
 - Pテストで80点以上取得した学生は免除
- ↓
学習習慣の獲得を期待

2018.9.10

H30全国大学教育センター等協議会・山梨大学における学習支援の事例

27

12

個別事例3:名古屋大学のアカデミック・スキルズ・ガイド

教授・学習サポートツール
 Tools and Resources
 名古屋大学新任教員ハンドブック
 Nagoya University New Faculty Handbook Revised version in 2018
名古屋大学生のためのアカデミック・スキルズ・ガイド
 高等教育グローバル化ファカルティガイド
 ティップス先生からの7つの授業
 成長するティップス先生
 ティップス先生のカリキュラムデザイン
 名古屋大学教員のための留学生受け入れハンドブック
 科学コミュニケーション Starter's Kit
 新入生のためのスタディティップス
 シラバステンプレート
 シラバス英語表記のための例文集
 ミニットペーパーテンプレート
 コーピングシラバス
 名大の授業
プログラムとサービス
 Programs and Services
プロジェクト
 Projects
出版物
 Publications

名古屋大学生のためのアカデミック・スキルズ・ガイド

名古屋大学において学習・研究を進めるために必要となる基本的なスキル (Common Basics) を取り上げ、解説したガイドです。トピックス別の各ガイドは、(1)当該トピックスの概要、(2)チェックリスト、(3)チェックリスト達成のための説明、(4)推奨文献という4つのパートから構成されています。各ガイドは2ページありますので、出力にはA4用紙両面印刷がお薦めです。学習を始める際に、また学習の中で戸惑った時に、お役立てください。

トピックス一覧：

- 議論する
- レポート課題に備える
- 実験レポートを書く
- 効果的なプレゼンテーションを準備する
- プレゼンテーション資料をデザインする
- クリティカルリーディングを行う
- データを参照する
- 質問紙でデータを収集する
- 質問紙で集めたデータをまとめる
- インタビューでデータを収集する
- インタビューで集めたデータをまとめる

13

Academic Skills Guide

名古屋大学生のためのアカデミック・スキルズ・ガイド

レポート課題に備える

授業を履修すると、レポートが課されることが多くあります。レポートを書くことが、学習した内容や調べた内容についての自分の思考を整理し、またそれを他の人に分かりやすい形で提示する訓練となるからです。大学の授業で教えられるトピックには、現在研究が進行中であり、学術界での定説が存在しないものも多くあります。そのため、レポートを書く際には、①事前に何をどのように調べ、理解したのか、②それについて自分は何を考えたのか、③どのように①と②を提示するのかの3点が重要になります。

②で述べられた「考える」とは、批判的に考えること (クリティカル・シンキング) を意味しています。クリティカル・シンキングとは、特定の仮説、見解、立場がなぜ正しいと言えるのかについて、その理由や根拠から考えることです。③の自分の調べたこと・考えたことを提示する際には、自分の考えた部分と参考にした資料に書いてあった部分をきちんと区別し、その区別を明確にすることも重要です。

Check!

これらの項目を履修に達成していきましょう。それぞれの具体的な方法は以下を読んでください。

- 最初にレポートの形式と課題の内容を確認しましたか？
- レポート執筆前に、時間管理や資料収集・読解を行うことができましたか？
- クリティカル・シンキングを行い、回答に対する議論をすることができましたか？
- 読みやすく分かりやすいレポートになっていますか？
- どの資料をどこで参考・引用にしたかが分かるような書き方になっていますか？

1 レポートの形式と課題の確認

◆レポートの形式の確認：レポートには表紙の有無、本文の長さ (字数・枚数)、紙のサイズ、フォントサイズ、提出期限、提出の仕方などが定められています。忘れずに確認し、きちんと守るようにしましょう。

2 時間管理と資料収集・読解

◆執筆計画と時間管理：レポートの計画から執筆、校正を経て提出までは時間のかかる作業です。他の予定を確認しながら、どの作業にどの程度の時間がかかるのかを見積もり、しっかりとスケジュールを立てることが重要です。

14

クリティカル・リーディングを行う

資料に書いてある内容を理解したり暗記するだけでなく、資料がどのように何を論じているのかを分析したり、資料で論じられている見解、立場の合理性を評価したりするために読むことをクリティカル・リーディングと言います。クリティカル・リーディングとは、書かれたことを自分で分析、検討しながら読むという能動的な読み方です。大学で読む資料には、まだ学術界でその正しさや価値が十分に立証されていないものや、一見そのように見えても、批判や再解釈の余地があるものが数多くあります。そのため、他の人が書いた資料に対してクリティカル・リーディングを行うことは、重要な学問的な活動なのです。

Check!

これらの項目を逐一確認していきましょう。それぞれの具体的な方法は以下を読んでください。

- 資料を読む前に、基礎情報の確認を行いましたか？
- 資料の書かれた歴史的、社会的な背景や文脈を調べましたか？
- 資料が書かれた目的と、その目的を達成するための議論の進め方を分析できましたか？
- 資料の見解の合理性を自分のバイアスを意識しつつ、検討してみましたか？

1 クリティカル・リーディングの準備

◆資料を調べ、基礎情報を確認する：インターネットや書庫、公立図書館を通じて資料を収集することもできますが、学術的な資料を集めるのに最も適しているのは大学図書館です。名古屋大学附属図書館は、たくさん新聞、学術雑誌、図書を所蔵していますし、図書館のウェブサイトを通じて利用できる電子ジャーナル、辞典も多くあります（他大学の図書館の資料も取り資料を収集する際には、その資料が自分の調べたい内容を持っているのか、どのような著者によって、どのような時代に書かれたのかを確認しましょう。論文の場合は、冒頭にその要旨と作者、年代が添えられています。本の場合は、OPAC やデータベースを使えば確認できます。一般に、より新しい研究に基づいて専門家が作成した資料やデータの方が、古いものよりも信頼できま

個別事例4: 愛媛大学
スタディ・ヘルプ・デスクと成績不振学生への対応

愛媛大学の学びのサポート体制

- 学生生活担当教員制度
- 学修ポートフォリオの活用
- スタディ・ヘルプ・デスクの設置
- オフィスアワーの設定
- T・A・S・Aの配置と研修
- スチューデント・キャンパス・ボランティア
- ノートテイク、パソコンノートテイク、代筆支援
- 学生相談体制
- 成績不振学生への対応と共有
- 学生リーダー養成プログラム
- 愛媛大学学生による調査・研究プロジェクト
- 海外派遣学生の支援
- 自主学習スペースの提供
- 課外講座の提供
- 図書館
- 愛媛大学教育改革促進事業
- 学生代表者会議
- 新任教職員研修における学習支援の情報の共有

スタディ・ヘルプ・デスク

スタディ・ヘルプ・デスクとは

大学院生のアドバイザーが共通教育科目を中心に個別指導を行うほか、勉強の仕方についてもアドバイスをを行い、大学の様々な面での学びのサポートをしています。授業内容についていけないときや、試験準備やレポートなどの課題で困ったときに、もっと高いレベルの学習技術を身に着けたいと感じたときに、ご利用ください。

サポート内容のご紹介

学習相談

- 英語、数学、物理、化学、生物、理系レポート、人文社会系科目、文系レポートの質問・相談に応じます。
- 教科以外については、学習相談、進学、留学、英会話、各種検定試験、教員採用試験に関する質問・相談に応じます。
- 上記内容に関して、必要に応じて適切な教職員や相談窓口を紹介したり、情報収集のお手伝いをします。

| 時間帯 | 月 | 火 | 水 | 木 | 金 |
|-----------------------|---|----------------------------------|--|-----------------------------------|---|
| 第3時間 12:40 - 14:10 | 数学 (H, T) 物理 (Ma) 英語・文系レポート (Ma) | 数学 (H, N) 物理 (V) 工学系物理 (Y) | 数学 (H, A) 化学 (G) 英語 (K) | 数学 (N, A) 物理 (Ma) 工学系物理 (T) | 物理 (V) 生物 (N) 英語 (M) |
| 第4時間 14:30 - 16:00 | 数学 (H, T) 物理 (M) 化学 (G) | 数学 (H, N) 化学 (G) 工学系物理 (V) | 数学 (H, N) 英語 (K) 工学系物理 (V) | 数学 (N, A) 物理 (Ma) 工学系物理 (T) | 数学 (T) 物理 (V) 生物 (N) 英語 (M) |
| 第5時間 16:20 - 17:50 | 数学 (H) 物理 (Ma) 英語 (Ma) 工学系物理 (K) | 数学 (T) 工学系物理 (K) 英語 (M) | 数学 (N) 英語 (M) 生物 (Ma) 工学系物理 (K) | 数学 (T) 物理 (V) 工学系物理 (K) | 数学 (T) 物理 (V) 化学 (S) 工学系物理 (K) |

*相談受付は17:30まで



17

成績不振学生への対応

- 各学部の成績不振学生への対応
 - 修得単位数やG P Aなどから成績不振学生の基準を明確化
 - 対応状況を教育学生支援会議で情報共有
- 学生支援センターによる対応
 - 履修指導を行う学生生活担当教員に対して共通教育科目の修得単位数が少ない学生を通知
 - 共通教育科目「こころと健康」(1回生全員必修：前学期)において、出席点検による不登校予防対策

18

学習支援に関する各大学の取り組み一覧 (H30全国大学教育研究センター等協議会資料より)

| 大学名 | 一部の学部でのリメデイアル教育 | ライティング(レポートの書き方)に関する科目 | 新入生向け教材 | 習熟度別クラス(語学など) | 専任教員による学習支援 | 修学困難学生へ対応(担任制等) | ネットワーク環境を整えたラーニングコモンズの設置 | キャリア支援 | 大学全体でアクティブラーニングを推進 | 学生・大学院生による学習支援(物理・化学・数学) | 大学院生による語学学習支援 | |
|-------|-----------------|------------------------|---------|---------------|-------------|-----------------|--------------------------|--------|--------------------|--------------------------|---------------|--|
| 北海道大学 | | ○ | ○ | | ○ | | ○ | | | ○ | | |
| 岩手大学 | | | | | ○ | | ○ | | | | | |
| 山梨大学 | ○ | | ○ | ○ | | | ○ | | | ○ | | |
| 東北大学 | | ○ | | | | | ○ | ○ | | ○ | ○ | |
| 茨城大学 | | ○ | | | | | | | | | | |
| 千葉大学 | | ○ | | | ○ | | ○ | | | ○ | ○ | |
| 筑波大学 | | ○ | | | | | ○ | | | ○ | | |
| 新潟大学 | | | | | | | ○ | | ○ | | | |
| 富山大学 | | | | △(数学, 物理) | | △(杉谷C) | ○ | | | △(杉谷C) | | |
| 福井大学 | | | | | | | | | ○ | | | |
| 名古屋大学 | | ○ | ○ | | | | ○ | | | | | |
| 三重大学 | | | | | | | | ○ | | | | |
| 島根大学 | | | | | | | | | ○ | ○ | | |
| 広島大学 | ○ | ○ | | ○ | | ○ | ○ | △(文学部) | | ○ | | |
| 山口大学 | | ○ | | | | | ○ | ○ | | ○ | | |
| 香川大学 | | ○ | | | | | ○ | | | | | |
| 徳島大学 | | | | | | | ○ | | ○ | | | |
| 愛媛大学 | | | | | | ○ | ○ | | | ○ | | |
| 長崎大学 | | | ○ | | | | ○ | | ○ | | | |
| 大分大学 | | ○ | | | | | ○ | | ○ | | | |
| 鹿児島大学 | | ○ | | | | | ○ | | | ○ | | |
| 琉球大学 | | | | | | | ○ | | | ○ | ○ | |
| | 教育プログラム | | | | 教育サービス | | | | 方法論 | | | |

本学での「厳格な成績評価」の位置付け

大学の目的(学則第3条)

本学は、地域と世界に向かって開かれた大学として、生命科学、自然科学と人文社会科学を総合した特色ある国際水準の教育及び研究を行い、人間尊重の精神を基本に高い使命感と創造力のある人材を育成し、地域と国際社会に貢献するとともに、科学、芸術文化、人間社会と自然環境との調和的発展に寄与することを目的とする。



ディプロマ・ポリシー

【卒業認定・学位授与方針】

〇〇学部〇〇学科では、本学科の目的に基づき所定の課程を修了し、以下に示す「幅広い知識」、「専門的学識」、「問題発見・解決力」、「社会貢献力」、「コミュニケーション能力」を身に付けた者に、学士(〇〇学)の学位を授与する。



カリキュラム・ポリシー

【教育課程編成方針】

〇〇学部では、卒業認定・学位授与方針(ディプロマ・ポリシー)に掲げる5つの能力を学修するために、〇〇学の教育課程を体系的に編成する。

【教育課程実施方針】

- ・ 1年次においては・・・
- ・ 2年次からは、・・・
- ・ 3年次では、・・・
- ・ 4年次においては、・・・



授業科目(教養教育, 専門教育)

ディプロマポリシー、カリキュラム・ポリシーに基づき授業内容を構成

シラバス上での項目

1. 授業のねらいとカリキュラム上の位置付け(一般学習目標)
2. 教育目標
3. 達成目標
4. 授業計画(授業の形式、スケジュール等)
5. 授業時間外学修
6. 成績評価の方法

第3期中期目標・中期計画

中期目標

- I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標
 - 1 教育に関する目標
 - (1)教育内容及び教育の成果等に関する目標
 - (2)成績評価

・厳格な成績評価を行い、学位の質を保証する。

中期計画

- I 大学の教育研究等の質の向上に関する目標を達成するためにとるべき措置
 - 1 教育に関する目標を達成するための措置
 - (1)教育内容及び教育の成果等に関する目標を達成するための措置
 - (2)成績評価

【8】シラバス等に明示した評価基準及びGPA(Grade Point Average)制度の導入により、成績評価の明確化、厳格化を図るとともに、GPA制度を活用した進級・卒業要件等の検討を行い明文化する。

他の要因

1. 高等教育の無償化の検討(2020年4月から実施予定)

【支援対象者の要件】

大学等に進学後、**単位数の取得状況**、**GPA(平均成績)の状況**、学生に対する処分等の状況に応じて、支給を打ち切る。

- ①1年間に取得が必要な単位数の6割以下の単位数しか取得していないとき
- ②**GPAが下位4分の1に属するとき**

【大学等の要件】

- ①実務経験のある教員による科目の配置
- ②外部人材の理事への任命が一定割合を超えていること
- ③**成績評価基準(※)を定めるなど厳格な成績管理を実施・公表していること**
- ④法令に則り財務・経営情報を開示していること

※ 成績評価を客観的かつ厳格に行うために、学修成果の評価に関して定める学内の基準。

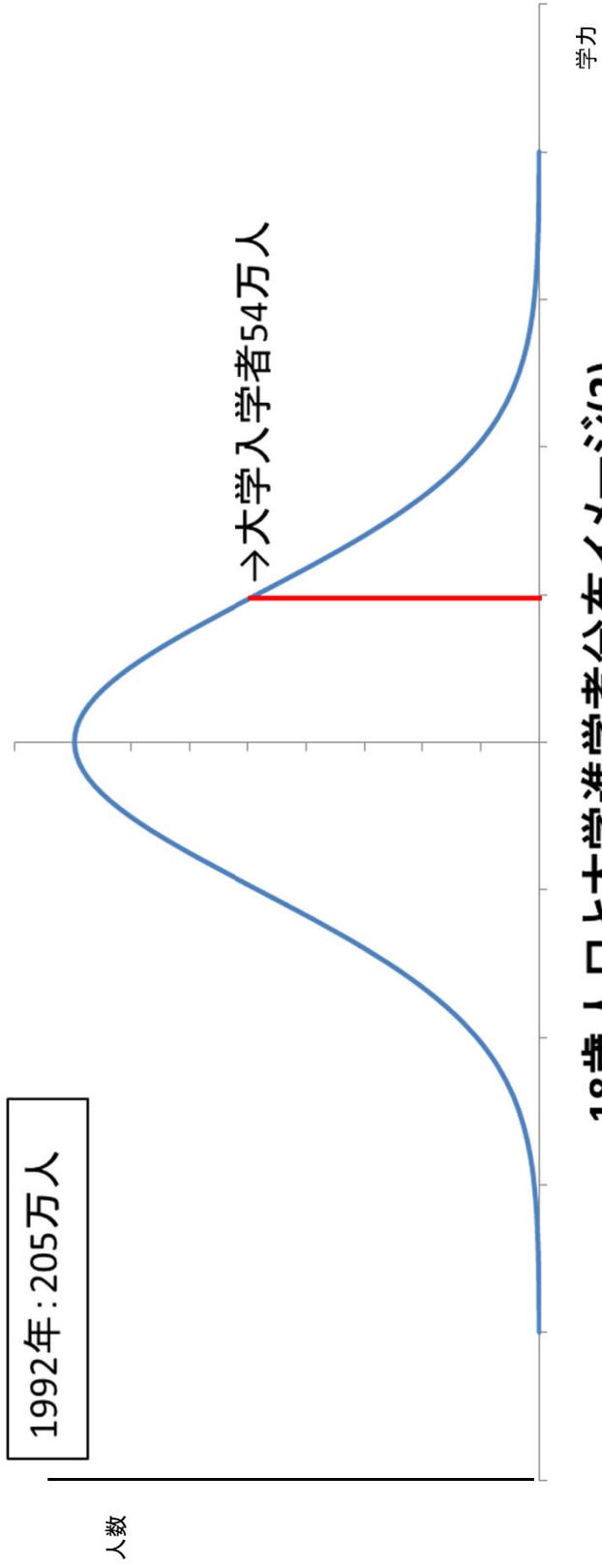
例えば、「特に優れている(S)」という評価を得るには、試験やレポート等による成績が90点以上、あるいは成績最上位20%程度であることが必要などと規定。

2. 授業料免除の成績基準に利用

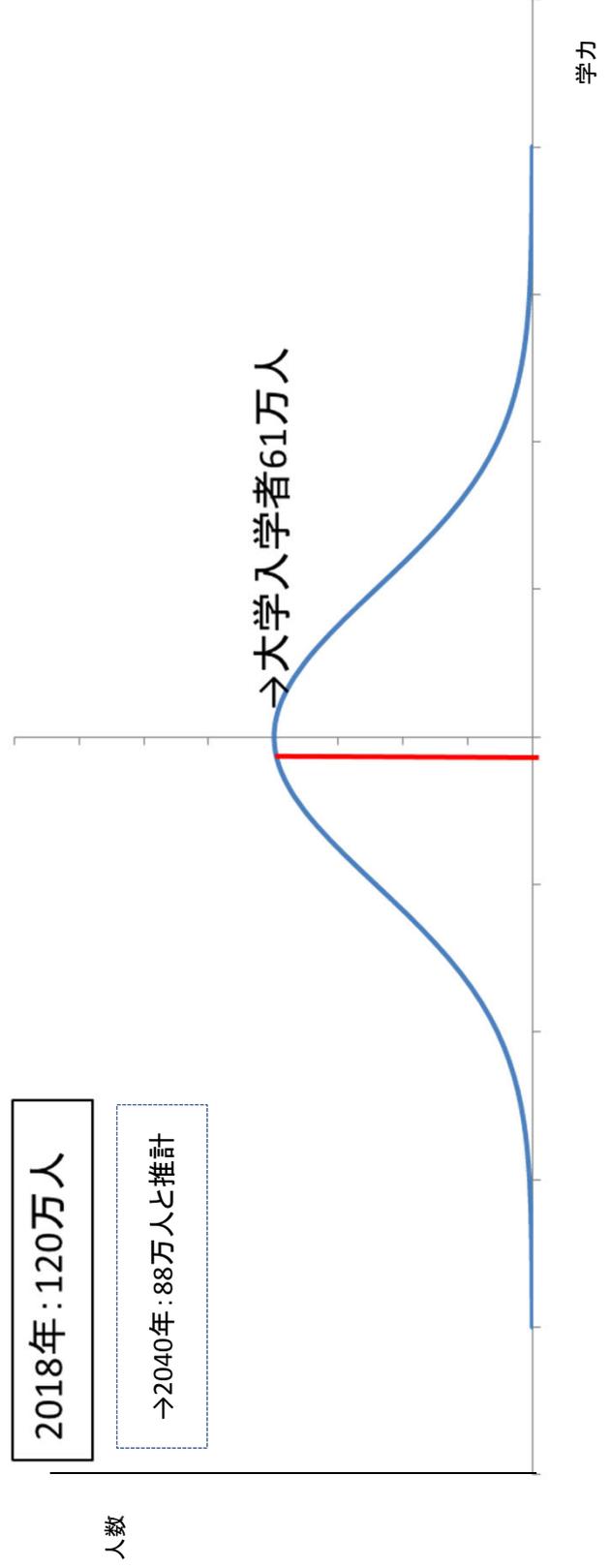
3. 日本学生支援機構奨学金の受給要件に利用

4. 学部によって、ゼミや研究室の決定の際に利用

18歳人口と大学進学者分布イメージ(1)



18歳人口と大学進学者分布イメージ(2)



2040年に向けた高等教育のグランドデザイン(答申)【概要】

平成30年11月26日
中央教育審議会

I. 2040年の展望と高等教育が目指すべき姿 … 学修者本位の教育への転換 …

● 必要とされる人材像と高等教育が目指すべき姿

- 予測不可能な時代を生きる人材像
- 普遍的な知識・理解と汎用的技能を文理横断的に身に付けていく
- 時代の変化に合わせて積極的に社会を支え、論理的思考力を持って社会を改善していく資質を有する人材
- 「何を学び、身に付けることができるのか」+個人々人の学修成果の可視化(個々の教員の教育手法や研究を中心にシステムを構築する教育からの脱却)
- 学修者が生涯学び続けられるための多様な柔軟な仕組みと流動性

● 高等教育と社会の関係

- 「知識の共通基盤」
- 教員と研究を通じて、新たな社会・経済システムを提案、成果を還元
- 研究力の強化
- 多様で卓越した「知」はイノベーションの創出や科学技術の発展にも寄与
- 産業界との協力・連携
- 雇用の在り方や働き方改革と高等教育が提供できる学びのマッチング
- 地域への貢献
- 個人の価値観を尊重する生活環境を提供できる社会に貢献

2040年頃の社会変化

国連SDGs「全ての人が平和と豊かさを享受できる社会」
SocietyV5.0 第4次産業革命 人生100年時代 グローバル化 地方創生

2040年頃の社会変化

国連SDGs「全ての人が平和と豊かさを享受できる社会」
SocietyV5.0 第4次産業革命 人生100年時代 グローバル化 地方創生

II. 教育研究体制 … 多様性と柔軟性の確保 …

多様な学生

- 18歳で入学する日本人を主な対象として想定する従来のモデルから脱却し、社会人や留学生を積極的に受け入れる体質転換
- リカレント教育、留学生交流の推進、高等教育の国際展開

多様な教員

- 実務家、若手、女性、外国籍などの様々な人材を登用できる仕組みの在り方の検討
- 教員が不断に多様な教育研究活動を行うための仕組みや環境整備(研修、業績評価等)

多様で柔軟な教育プログラム

- 文理横断・学修の幅を広げる教育、時代の変化に応じた迅速かつ柔軟なプログラム編成
- 学位プログラムを中心とした大学制度、複数の大学等の人的・物的資源の共有、ICTを活用した教育の促進

多様性を受け止める柔軟なガバナンス等

- 各大学のマネジメント機能や経営力を強化し、大学等の連携・統合を円滑に進められる仕組みの検討
- 国立大学の一法人複数大学制の導入、経営改善に向けた推進強化、撤退を含む早期の経営判断を促す指針、国公私立の枠組みを越えて、各大学の「強み」を活かした連携を可能とする「大学等連携推進法人(仮称)」制度の導入、学外理事の登用

大学の多様な「強み」の強化

- 人材養成の観点から各機関の「強み」や「特色」をより明確化し、更に伸長

III. 教育の質の保証と情報公表 … 「学び」の質保証の再構築 …

● 全学的な学修マナジメントの確立

→ 各大学の学修面での改善・改革に資する取組に係る指針の作成

● 学修成果の可視化と情報公表の促進

- 単位や学位の取得状況、学生の成長実感・満足度、学修に対する意欲等の情報
- ・ 教育成果や大学教育の質に関する情報の把握・公表の義務付け
- 全国的な学生調査や大学調査により整理・比較・一覧化

● 設置基準の見直し

(定員管理、教育手法、施設設備等)について、時代の変化や情報技術、教育研究の進展等を踏まえた抜本的な見直し)

● 認証評価制度の充実

(法令違反等に対する厳格な対応) …… 教育の質保証システムの確立

V. 各高等教育機関の役割等 … 多様な機関による多様な教育の提供 …

● 各専科種(大学、専門職大学・専門職短期大学、短期大学、高等専門学校、専門学校、大学院)

における特有の課題の検討

● 転入学や編入学などの各高等教育機関間の接続を含めた流動性を高め、より多様なキャリアパスを実現

IV. 18歳人口の減少を踏まえた高等教育機関の規模や地域配置 … あらゆる世代が学ぶ「知の基盤」…

高等教育機関への進学者数とそれを踏まえた規模

- 将来の社会変化を見据えて、社会人、留学生を含めた「多様な価値観が集まるキャンパス」の実現
- 学生の可能性を伸ばす教育改革のための適正な規模を検討し、教育の質を保証できない機関へ厳しい評価

地域における高等教育

- 複数の高等教育機関と地方公共団体、産業界が各領域における将来像の議論や具体的な連携・交流等の方策について議論する体制として「地域連携プラットフォーム(仮称)」を構築

国公私役割

- 歴史的経緯と、再整理された役割を踏まえ、地域における高等教育の在り方を再構築し高等教育の発展に国公私全体で取り組む
- 国立大学の果たす役割と必要な分野・規模に関する一定の方向性を検討



VI. 高等教育を支える投資 … コストの可視化とあらゆるセクターからの支援の拡充 …

- 国力の源である高等教育には、引き続き、公的支援の充実が必要
- 社会のあらゆるセクターが経済的効果を含めた効果享受することを踏まえた民間からの投資や社会からの寄附等の支援も重要(財源の多様化)

- 教育・研究コストの可視化
- 高等教育全体の社会的・経済的効果を社会へ提示

- 公的支援も含めた社会の負担への理解を促進
- 必要な投資を得られる機運の醸成

高等教育の負担軽減の具体的方策について

（報告）

平成30年6月14日

高等教育段階における負担軽減方策に関する専門家会議

<目次>

| | |
|---|----|
| はじめに | 2 |
| I 負担軽減の対象範囲 | 3 |
| 1. 授業料減免 | 3 |
| (1) 大学 | |
| (2) 短期大学、高等専門学校及び専門学校 | |
| 2. 給付型奨学金の大幅拡充 | 5 |
| II 支援対象者の要件 | 7 |
| III 支援措置の対象となる大学等の要件 | 9 |
| 1. 実務経験のある教員による授業科目の配置 | 10 |
| 2. 外部人材の理事への任命 | 11 |
| 3. 厳格な成績管理の実施・公表 | 12 |
| 4. 法令に則った財務・経営情報の開示 | 13 |
| (1) 財務諸表等の情報 | |
| (2) 教育活動に係る情報 | |
| IV その他円滑かつ確実な実施に際して必要な事項 | 14 |
| 1. 実施体制の構築等 | |
| 2. 不正を防止し、効果的な支援を実施するための方策 | |
| (資料1) 高等教育段階における負担軽減方策に関する専門家会議について (平成30年1月19日高等教育局長決定) | 16 |
| (資料2) 高等教育段階における負担軽減方策に関する専門家会議開催経緯 | 18 |

Ⅲ 支援措置の対象となる大学等の要件

【政策パッケージ（平成29年12月8日）（抄）】

（支援措置の対象となる大学等の要件）

こうした支援措置の目的は、大学等での勉学が就職や起業等の職業に結びつくことにより格差の固定化を防ぎ、支援を受けた子供たちが大学等でしっかりと学んだ上で、社会で自立し、活躍できるようになることである。このため、支援措置の対象となる大学等は、その特色や強みを活かしながら、急速に変わりゆく社会で活躍できる人材を育成するため、社会のニーズ、産業界のニーズも踏まえ、学問追究と実践的教育のバランスが取れている大学等とする。具体的には、①実務経験のある教員による科目の配置及び②外部人材の理事への任命が一定割合を超えていること、③成績評価基準を定めるなど厳格な成績管理を実施・公表していること、④法令に則り財務・経営情報を開示していることを、支援措置の対象となる大学等が満たすべき要件とし、関係者の参加の下での検討の場での審議を経て、上記を踏まえたガイドラインを策定する。

- 今回の支援措置の目的は、大学等での勉学が就職や起業等の職業に結びつくことにより格差の固定化を防ぎ、支援を受けた子供たちが大学等でしっかりと学んだ上で、社会で自立し、活躍できるようになることである。このため、支援措置の対象となる大学等は、その特色や強みを活かしながら、急速に変わりゆく社会で活躍できる人材を育成するため、社会のニーズ、産業界のニーズも踏まえ、学問追究と実践的教育のバランスが取れている大学等とし、4つの要件を求めることとする。
- 教育の質が確保されておらず、大幅な定員割れとなり、経営に問題がある大学等について、高等教育の負担軽減により、実質的に救済がなされることがないよう、支援措置の対象となる大学等の要件において、必要な措置を講じていくこととする⁸。

⁸ 例えば、経営に問題があるとして早期の経営判断を促す経営指導の対象となっており、かつ、継続的に定員の8割を割っている大学については、対象にしないことなどを検討する。

1. 実務経験のある教員による授業科目の配置

【政策パッケージ（平成29年12月8日）（抄）】

①実務経験のある教員による科目の配置が一定割合を超えていること[※]

※ 例えば、①実務経験のある教員（フルタイム勤務ではない者を含む）が年間平均で修得が必要な単位数の1割以上（理学・人文科学の分野に係る要件については、適用可能性について検証が必要）の単位数に係る授業科目を担当するものとして配置されていることといった指標が考えられる。

- 社会で自立し、活躍できる人材を育成する上で、人文社会・自然科学といった学問分野の違いに関わらず、学問追究の観点とともに、**実際の社会のニーズに対応した経験に基づく実務の観点を踏まえた教育の実施が求められる**。このような趣旨から、それぞれの学部等の学問分野の特性に応じて、実務経験のある教員（フルタイム勤務ではない者を含む。以下同じ。）による実社会のニーズや変化に対応した授業科目が配置され、学生がそれらを履修し得る環境が整っていることが必要である。
- 具体的には、各学部等（学問分野の特性等により満たすことができない学部等を除く。）において、卒業に必要となる標準単位数⁹の1割以上、実務経験のある教員による授業科目が配置されていることを要件とし、全ての学部等が要件を満たすことが必要である。
- ここでいう「実務経験のある教員」とは、単に教員に学外での勤務経験があるだけでは足りず、担当する授業科目に関連した実務経験を有している者を指し、「実務経験のある教員による授業科目」とは、その実務経験を十分に授業に活かしつつ、実践的教育を行っていることを指す。
経営者、技術者、研究者、行政官等の実務経験のある教員が指導する授業のほか、必ずしも実務経験のある教員が直接の担当でなくとも、例えば、オムニバス形式で多様な企業等から講師を招いて指導を行っている、企業等から提供された課題（企画提案等）に取り組む、学外でのインターンシップや実習、研修を授業の中心に位置付けているなど、主として実践的教育から構成される授業科目は、実務経験のある教員による授業科目に含むものとする。
- 学問分野の特性等により満たすことができないと認められる学部等については、大学等が、学部等の特性等からやむを得ない理由や、実践的教育の充実に向けた取組を説明・公表することが必要である。
- なお、実務経験のある教員による授業科目か否かについては、授業計画（シラバス）等で明らかにする必要がある。

⁹ 大学（4年制）：124単位（大学設置基準第32条）、短期大学（2年制）：62単位（短期大学設置基準第18条）、高等専門学校：66単位（4・5年生に限る。高等専門学校設置基準第18条）、専門学校（昼間課程）：800単位時間に修業年限の年数に相当する数を乗じて得た授業時数（専修学校設置基準第17条）

3. 厳格な成績管理の実施・公表

【政策パッケージ（平成29年12月8日）（抄）】

③成績評価基準*を定めるなど厳格な成績管理を実施・公表していること

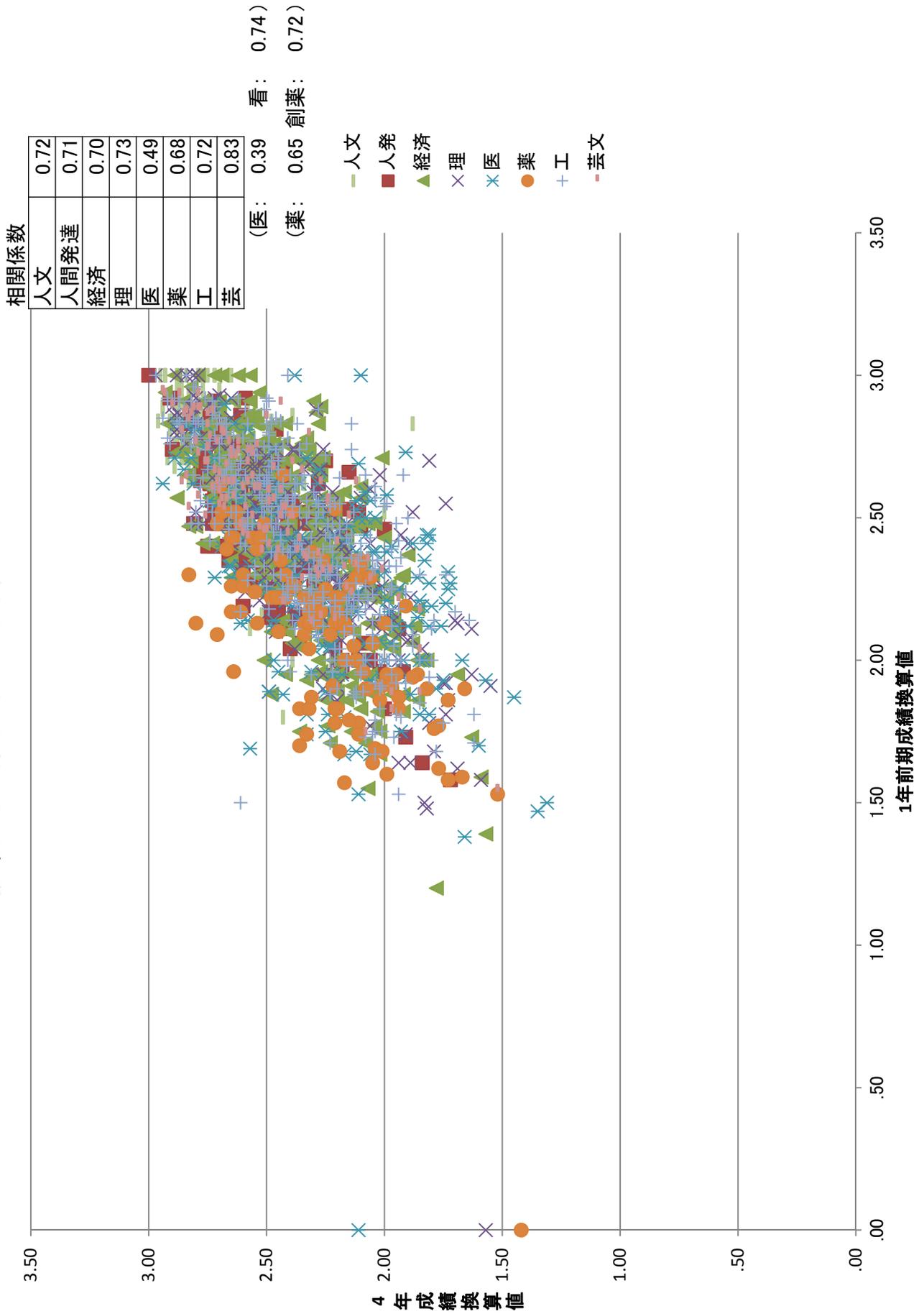
※ 成績評価を客観的かつ厳格に行うために、学習成果の評価に関して定める学内の基準。例えば、「特に優れている（S）」という評価を得るには、試験やレポート等による成績が90点以上、あるいは成績最上位20%程度であることが必要などと規定されている。

- 今回の支援措置は、支援を受けた子供たちが大学等でしっかりと学んだ上で、社会で自立し、活躍できるようになることを目的としていることから、支援対象者について、大学等への進学後、学習状況について一定の基準を設定し、これに該当する場合には支給をしないこととしている。

このような仕組みを機能させるための前提として、大学等において、成績評価基準を定め、厳格かつ適正な成績管理を実施・公表していることを求めることとし、具体的には、以下の取組を行っていることを要件とする。

- ・ 各授業科目について、授業の方法及び内容、到達目標、成績評価の方法や基準その他の事項を記載した授業計画（シラバス）を作成し、公表していること
 - ・ 学習意欲の把握、試験やレポート、卒業論文などの適切な方法により、学修成果を厳格かつ適正に評価して単位を与え、又は、履修を認定していること
 - ・ 成績評価において、GPAなどの客観的な指標を設定し、公表するとともに、成績の分布状況の把握をはじめ、適切に実施していること
 - ・ 卒業の認定に関する方針・基準を定め、公表するとともに、適切に実施していること
- 単位の修得状況、GPAなどの客観的な指標による評価の状況、卒業認定の状況など、上記の取組を通じて把握した学生の学修成果や各大学等の教育成果の状況については、大学等が教育活動の不断の改善を自主的に図る観点から、積極的に公表していくことが必要である。

換算点相関図(全学部)



第2部：講義における問題点の抽出

Aグループ：理系基盤教育の選択科目の現状と今後の課題

ファシリテーター：杉森 保（教養教育院）

Bグループ：外国語の現状と今後の課題

ファシリテーター：福田 翔（教養教育院）

Cグループ：多人数講義の現状と今後の課題

ファシリテーター：谷口 美樹（教養教育院）

討論内容は次ページ以降に

Aグループ「理系基盤教育の選択科目の現状と今後の課題」グループ討議報告

結論： 1. 現行の科目はいずれもすべての学生が「履修せずとも卒業できる科目」となっている。今後の推移を見ながら各学部での扱いについて検討を求めたり、内容を検討したりしてはどうか。

2. 理系基盤教育に求められる選択科目のひとつとして「サイエンスライティング」に関する科目の設置について検討してはどうか。

表 理系基盤教育系選択科目（平成30年度版教養教育ガイドより抜粋）

| 教養教育科目名 | 単 位 数 | 地 域 志 向 科 目 | 学部・学科名 | | | | | | | | | |
|----------------|-------------|----------------------------|------------------|---------------------------------|------------------|-------------|----------------------------|---------------------------------|-------------|-------------|----------------------------|--------------------------------------|
| | | | 人 文 学 部 | 人 間 発 達 科 学 部 | 経 済 学 部 | 理 学 部 | 医 学 部 医 学 科 | 医 学 部 看 護 学 科 | 薬 学 部 | 工 学 部 | 芸 術 文 化 学 部 | 都 市 デ ザ イ ン 学 部 |
| 線形代数学 | 2 | | - | - | - | - | ○ | ○ | ○ | - | - | - |
| 自然現象のモデル化とその解析 | 2 | | - | - | - | - | ○ | ○ | ○ | ○ | - | - |
| 現代物理学入門 | 2 | | - | - | - | - | ○ | ○ | ○ | - | - | - |
| 量子化学入門 | 2 | | - | - | - | - | ○ | ○ | ○ | - | - | - |
| 生物無機化学入門 | 2 | | - | - | - | - | ○ | ○ | ○ | ○ | - | - |

※1. ○：必修科目，○：選択科目，△：自由科目，-：履修不可，●：専門科目として開講

討議概要：討論をはじめるとにあって参加者に資料を提示し、理系基盤教育系科目の中で特に話題として取り上げたい選択科目（右表および図）を確認していただいた。昨

年度までと異なり、いずれの科目も全学部で系列指定もされておらず、履修しなくても卒業できる科目となっており、その結果として履修者数の激変を招いたと考えられる。その上で、まず当該科目を担当している先生方から昨年までと今年との状況の変化や感じるることについて述べていただいた。その中では「これまでは選択必修だったために特に興味が

無いのに履修している学生がいたのが、本当に取りたい学生だけになって教えやすい」という意見があった一方で「これまで医薬系の学生向けに準備してきた科目の履修者が激減したのは残念」との意見もあった。また、「医・薬学部で必修にすべき内容と思われる科目が含まれている」という意見の一方、「理・工学部の学生がとるメリットは少ない科目や理・工学部ではそもそも卒業要件単位に含まれていない科目もある」との意見もあった。

このような現状を共有した上で、本グループでは新たに理系基盤系で必要とされる内容・科目はどのようなものかという点に焦点を絞り、特に第1部で紹介された「サイエンスライティング」に関する意見を述べていただいた。多くの先生方から「文章を書く力・レポート作成能力・文献を読む力に欠けた学生

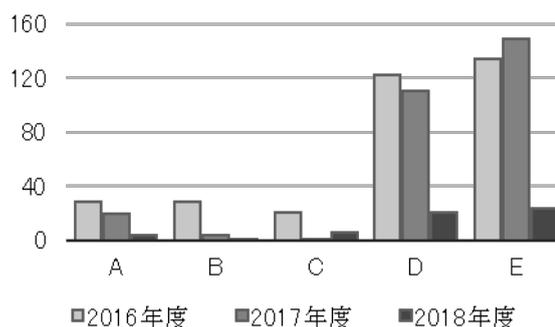


図 理系基盤教育系選択科目の履修者数（直近3年）：いくつかの学科で「選択必修」の扱いになっていたものが今年度から「選択科目」となり、その影響もあってか履修者数が激減している。

が多い」との意見が述べられ、理系基盤教育系科目として準備できれば理想的であるとの見解で一致した。一方で「このような科目が選択で良いのか」「複数の教員が関わるなら科目の目標を明確に統一すべき」といった意見に加え、「必修とするならば教養教育院の教員だけでは困難」との発言もあった。当該科目の新設および必修化については、学部所属教員から「最終的に学部に丸投げになるのは困る」などの意見もあり、カリキュラム改定が可能となる3年後をめどに慎重に準備を進めていくことが望ましいと結論づけた。

一方、現在開講されている選択科目については、次年度以降履修者が増える可能性もあるので内容の魅力を伝えられるようにしたいという意見もあったが、理・工学部で卒業要件単位に含まれていない現状ではとりうる対応は限られると思われる。各学部での扱いについて検討を求めたり、内容の変更も検討したりする必要があるのではないかと結論に至った。

文責：杉森 保（教養教育院、Aグループファシリテーター）

Bグループ：「外国語の現状と今後の課題」

・外国語部会（または教養教育院）における今後の人事計画

今後、退職者が出た際に、英語、初修外国語を含め、どの言語で優先的に教員補充を行うかということが問題となる。現時点では、英語での教員補充の必要性が最も高いことは言うまでもない。初修外国語では、中国語での非常勤講師依存率が高い。そこには、中国語の外国人専任教員のポストを英語に譲ったという経緯もある。また、教養教育院に本来くるべきポイントもまだ揃っていない。このような中で、皆が納得するような合理的な基準を設け、また全学的な理解を求めながら、人事を進めていく必要がある。

・外国人専任教員の事務サポート

現在、教養教育院では、外国人専任教員に対するサポート体制がない状態である。教養科目を主に担当している外国人専任教員が教養教育院に所属している以上、その事務サポートを行う体制が必要である。

・「全学ネットワーク」の必要性

全学的に英語の重要性は非常に高い。その中で、教養教育院が主体となって、まずは会話や読み書きの基礎等をしっかりと行って欲しいという意見が、工学部の教員から出された。工学部では、2～4年次の学生に対して、プレゼン力、会話力の向上のための英語の授業やTOEIC講座等を、工学部の学生のニーズに合わせた形で行っている。そこで、1年次の英語教育については、学生の英語力向上のために、教養教育院の教員とさらに連携を強めていきたいと考えているということである。つまり、教養教育院と各学部とでしっかりと情報共有を行った上で、今後の英語教育を考えていくことが非常に重要である。

また、CALL教室や図書館等にある語学関係の書籍の管理についても、各キャンパス、各部局での連携が十分に取れてはならず、このような授業外での支援に関わることについても、今後全学ネットワークを作ることで、上手く管理・運営していく必要がある。

・教員内での情報共有

外国語は、同一の科目が横並びで複数開講されているが、それを担当する教員間で、話し合いや情報共有が十分に行えているとは言いえない状況である。その中で、たとえば習熟度別クラス、リメディアル教育、ESP (English for specific purposes)、1クラスにおける文理混合或は学部別、また教員間でどの程度授業内容を合わせるべきか（或は個人の裁量の部分を大きくするのか）等、様々な課題が存在している。そこで、まずは、外国語のみ（英語のみ或は初修外国語のみ）で、FD等を開催し、話し合いの機会を持つことから始める必要がある。

文責：福田 翔（教養教育院、Bグループファシリテーター）

C グループ:「多人数講義の現状と課題」

- 現況についての情報交換・
- 取り組むべき課題・今後の方向性について—

受講生が自らの知的好奇心に気づき、自律的な学修姿勢を培っていくために、教養教育選択科目は開講されている。C グループでは、教養教育の現況について情報交換を行い、これからの教養教育のあり方に向けて、取り組むべき課題を具体化することを目的に話し合いを行なった。参加者は、教養教育選択科目を提供している、人文科学系・社会科学系・自然科学系・理系基盤教育系・保健体育系・情報処理系などの、教員と学生である。なお選択科目は教室の座席数を上限として受講生を受け入れているため、ほとんどの開講科目で多人数教育となっている。

話し合いではさまざまな意見が述べられたが、多人数教育のあり方という観点から以下、その一端を紹介する。

1 現況についての情報交換

(1) 担当教員による教室運営の工夫

- ・プロジェクターで投影する資料を moodle 上にも公開している。スクリーンを見ることができない座席への対策にもなっている。
- ・受講生同士で意見を交換する時間を授業内に確保している。
- ・受講生の意見を一覧にして配布している。受講生たちは他の受講生の意見を紙面で知ることができる。
- ・受講生の興味・関心を引き出す話題を語るようにしている。

(2) 多人数教育の学修効果

- ・多様な見解があることを理解する機会となっている。
- ・学部を越えて、受講生間の交流が生じている。

2 受講生の学修効果を高めるために

(1) 学修環境の整備

受講生が授業に集中でき、担当教員が円滑に教室運営を行えるように、たとえば視聴覚機材の充実、プリント配布台の設置、カードリーダーの設置場所の検討など、設備面からの支援があげられる。

(2) アクティブ・ラーニング

アクティブ・ラーニングに対する学生の感想として、アクティブ・ラーニングを用いた授業がもう少しあってもよいという意見や、効率が悪い・発表するのが恥ずかしいなどの意見があったことなどが紹介された。

文責: 谷口 美樹(教養教育院、Cグループファシリテーター)

第3部：今後の教養教育院のあり方：期待と要望

① 全学の教育推進における教養教育院への期待

講師：橋本 勝（教育推進センター・教授）

1. 是非、持ってほしい3つの自覚

(1) 教養教育＝学士課程教育の核心

学士課程教育という言葉が使われ出して20年近く経った。

この言葉が最初に出てきたときに、これからの大学は変わるのだ、何が変わるのか、それまで教養とっていたものが、4年間全体でやる。今まで専門でやっていたものが大学院でやる。だから新しい言葉として学士課程教育を使う。

ディプロマポリシーという言葉は、学士課程教育が使われ始めた頃から意識されていたことではないか。

教養教育は大学教育のいちばん核心の部分であることを共有したい。

(2) 大学の一番の目的＝21世紀型市民の育成

このことは、今は当たり前のことであると思われるが、今の大学には古い体質も残っている。

これはどういうことかという、大学は研究するところだ。教員もいちばんの仕事は研究である。FD活動は2番手の仕事だ、という考え方である。

しかし、大学が相手にしている学生たちは層が違ってきている。いちばんの目的は、研究者の養成ではない。（研究心？）の養成でもない。

21世紀をたくましく生きていってもらう市民を養成する。責任ある市民を養成する。

集団の中では多少はリーダーっぽい市民を養成するということが、大学教育の一番の目的ではないかと考える。

(3) 学生＝学びを創造する存在

学生は、（橋本先生の言葉で表現すると）「学びを創造する存在」である。

よく「学びの主権者」という言葉を使う。

教える、教えられるという関係ではない。

学生が何を学ぶかは、学生自信が自分なりに考えていく。主体的に行動していく。学びはそこからはじめて本物になる。

何を伝えるかということから、何を学び取るか。こちらの方に力点がおかれなければならない。

学生は顧客でもなければ商品でもない。人間として付き合いしていく上で、学びを創造する存在、学びを創っていく、できれば教員と一緒に創っていく存在であってほしい。

こういう3つの意識を先生方にぜひ認識していただきたい。

2. できれば、継承してほしい3つの「ツール」

(1) シャトルカード

2011年に導入した。

まだ浸透していない。

使い方は自由である。

学生とのやりとりをすることが大切ではないか。

(シャトルカードを使う)良さに気づく教員もいる。

(2) 多人数対話型授業

ポイント

- ・学生笑顔と目の輝きを大切にしている
- ・授業の活性化
- ・教育理論にこだわらない自然体の教育
どなかたかにひきついでもらいたい。

(3) UD Mates

UDとは、学生・教員・職員・市民が協働で学生の主体的な学びの促進を考え、大学教育を発展・深化させようとするムーブメントである。

今回のFD研修会にも学生が参加した(1名)。

3. 可能なら、継承・参画を検討してほしい2つの授業

(1) 新聞投稿に挑戦

教員の専門は問わない

特別な文章指導はしない。

どうすれば、言いたいことが言えるか、書きたいことを書けるか、ということ徹底してトレーニングする。言いたいことを言う、書きたいことを書くという学生の本能的な部分をうまく引き出したい。何とかこの授業を引き継いでもらいたい。教養教育院でも考えてもらいたい。

(2) 富山から考える震災・復興学

どうして震災の授業が必要かという、自分の身に降りかかることもあるし、大学として大きな災害がおきたときにそれとどう向き合うかということを示す一つの例である。

ボランティアを送り出す、金銭的な支援をおこなうと言うことではなく、大学としてしっかりとその問題を受け止めるには、今いる学生たちにそれにしっかりと向き合ってもらおう。

自分たちの問題でもある、社会の問題でもある、そういう意識でもっておこなっている授業である。ここでアクティブラーニング的なこととりいれている。

② 学部教務委員会からの意見および全体討論

関根先生（医学部）

学士課程教育の質を保証する学習支援とか、成績評価の厳格化など大学に求められている改革は、経済界からの要望を反映した内容であることを考慮する必要が有るのでないか。

寺林学務課長の話の中の初年次教育と4年次教育の成績が相関することについて、私（関根）の分析は、医学科では相関が見られたのは個別学力試験と初年次教育の成績であった。このように初年次の成績の原因の原因を分析することも必要となるのではないか。

教養教育院への期待。分野別評価や教養分離との考え方が入ってきたときに、教養教育院と専門教育の連携（接続）のシステム作りが課題ではないか。

参加学生

アクティブラーニングのメリット（他学部学生との交流）を生かした授業の仕組み（テーマ）を作っていただくと良いのではないか。

若杉先生（理学部）

学部教育との連携を考えていく必要がある。

教養教育が大きく変わったことにより、どういった効果があったのかをしっかりと検証していく必要がある。

渡邊先生（工学部）

アカデミックライティングなど、自分の専門外の講義を担当することができたら良いのではないか。

アカデミックライティングに関する教育は工学部でも必要としており、できれば必修にしたいという気持ちはある。工学部の教員が参加しやすい形がどういふものなのかを考えていただきたい。

伊藤先生（人文学部）

FD研修会に参加して教養教育の全体的な課題を認識できた。

多くの教員は自分の業務だけに精一杯で、教養でどんなことが起こっているのか、どういうことをやろうとしているのかなどが見えないままなので、もっとたくさんの教員が参加すべきだと思った。教養教育の授業のことや、システムのことを研修会に参加した教員が学部を持ち帰ることで、それが引いては教員のモチベーションを上げることに繋がるのではないか。

春木先生（都市デザイン学部）

都市デザイン学部ではクォーター制度を実施しているので、教養の単位を取りこぼした学生への対応が課題である。

笹野先生（教養教育院）

教養教育院から学部への意見として、まず、教養と専門の連携ということについては、本来ならこの役割を果たす企画実施委員会が機能していないので、ひとまず、教養教育のワーキンググループと学部との話し合いが必要である。

クォーター制、セメスター制と教養の単位取得ということについては、1年生の間で教養の単位を全て取得できなければ留年する、ということが一つの解決策であろうが、各学部に於いてはせめて2年生までの間で単位を取得するよう強く指導して欲しい。

名執先生（教養教育院）

進級バリアをもうけると留年が増加します。多重留年してしまうものも出てくる。修学困難な学生への対応について学部と連携をとる必要がある。

若杉先生（理学部）

修学困難な学生への対応は学部でも助言教員を通して行っているが、それでも大学に出てこない、授業に出席しない学生への対応はどうしたものか。

鳥海先生（教養教育院）

学部の先生には、所属する部会以外の授業（アカデミックライティングなど）を担当することに協力することをお願いしたい。

玉木先生（工学部）

アカデミックライティングの必修化については、学部に丸投げしないで教養教育院でよく検討して欲しい。

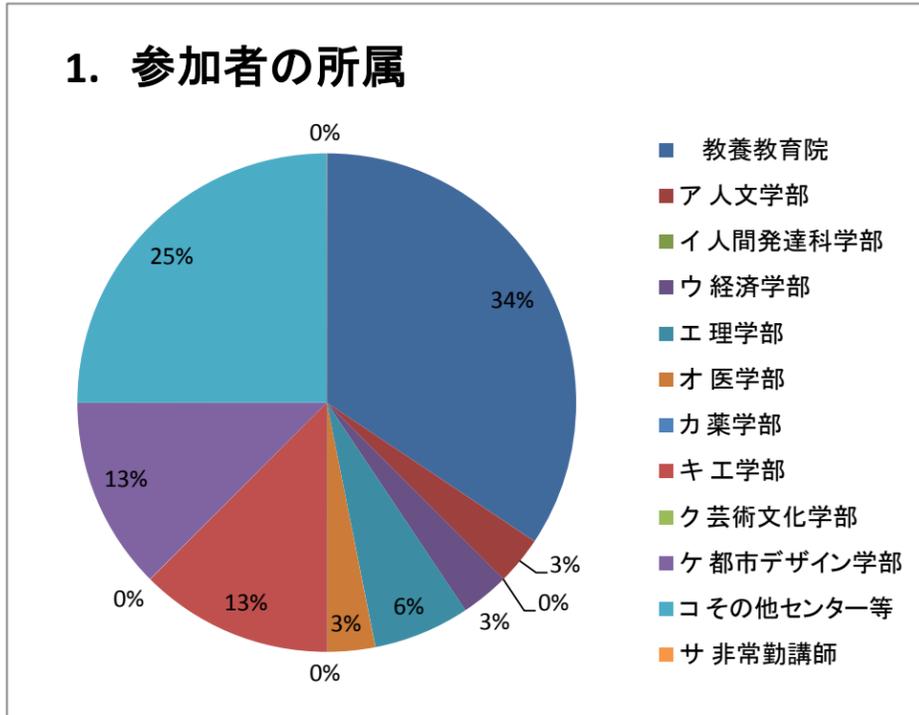
教養教育の履修登録について、学生が履修したい授業が履修できない事態を早急に解消してほしい。

教養教育院FD2018アンケート結果

平成30年12月26日実施

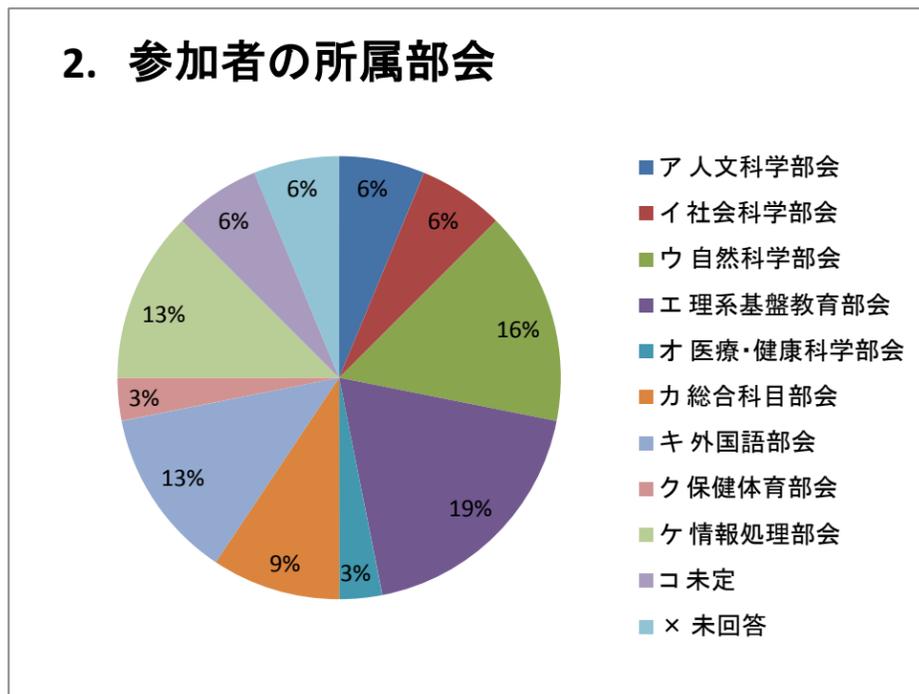
1.所属を○で囲んでください。

| | 所属 | 人数 |
|---|----------|----|
| | 教養教育院 | 11 |
| ア | 人文学部 | 1 |
| イ | 人間発達科学部 | 0 |
| ウ | 経済学部 | 1 |
| エ | 理学部 | 2 |
| オ | 医学部 | 1 |
| カ | 薬学部 | 0 |
| キ | 工学部 | 4 |
| ク | 芸術文化学部 | 0 |
| ケ | 都市デザイン学部 | 4 |
| コ | その他センター等 | 8 |
| サ | 非常勤講師 | 0 |
| | 合計 | 32 |



2.所属部会を○で囲んでください。

| | 所属 | 人数 |
|---|-----------|----|
| ア | 人文科学部会 | 2 |
| イ | 社会科学部会 | 2 |
| ウ | 自然科学部会 | 5 |
| エ | 理系基盤教育部会 | 6 |
| オ | 医療・健康科学部会 | 1 |
| カ | 総合科目部会 | 3 |
| キ | 外国語部会 | 4 |
| ク | 保健体育部会 | 1 |
| ケ | 情報処理部会 | 4 |
| コ | 未定 | 2 |
| × | 未回答 | 2 |
| | 合計 | 32 |

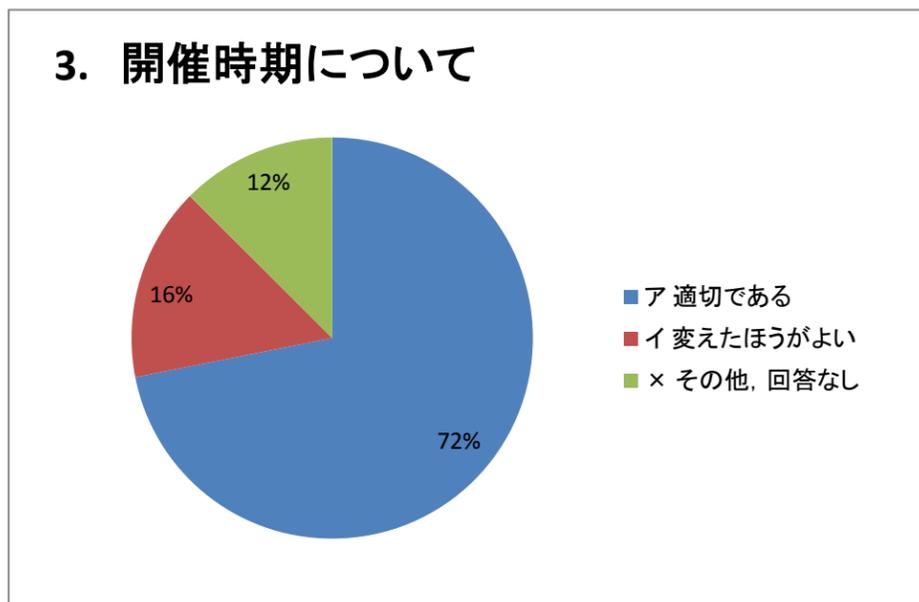


3.開催時期について、どう思いますか？

| | 選択肢 | 人数 |
|---|----------|----|
| ア | 適切である | 23 |
| イ | 変えたほうがよい | 5 |
| × | その他、回答なし | 4 |
| | 合計 | 32 |

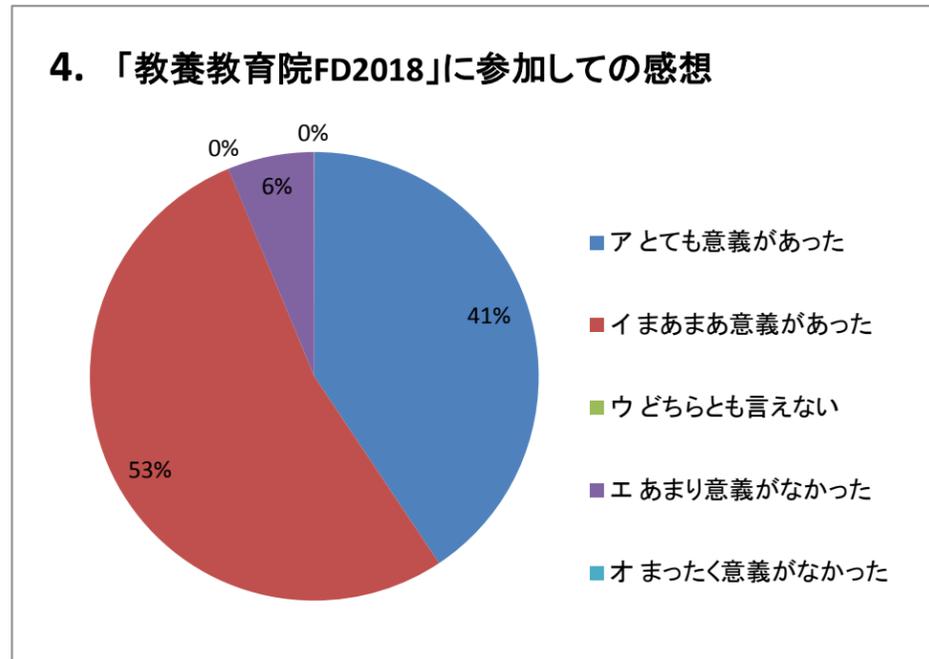
主な意見

| | |
|---|--------------|
| ア | 来年度に向けて適切である |
| イ | 春休み・夏休み |
| イ | 9月ごろ |
| イ | 行事が少ない時期 |
| イ | 学生が参加しやすい時期 |



4.「教養教育院FD2018」に参加しての感想及びその理由を御記入ください。

| 選択肢 | 人数 |
|---------------|----|
| ア とても意義があった | 13 |
| イ まあまあ意義があった | 17 |
| ウ どちらとも言えない | 0 |
| エ あまり意義がなかった | 2 |
| オ まったく意義がなかった | 0 |
| 合計 | 32 |



「ア.とても意義があった」と答えた理由

- ・今の大学教育の問題が垣間見えたのでよかった。
- ・教養教育院の先生方、学務部より、しっかりした調査、課題等のまとめがされており、意気込み・熱意を感じられよかったです。また、討論でも有意義な提案もあって、思っていた以上によいFDと思いました。ぜひ毎年このような、報告、意見交換会を開いてほしいです。
- ・学部間の連携の重要性
- ・専門の方の意見を聞くことができてよかったと思う。
- ・今後、どうつなげていくか出された問題点をいかに実施・改善していくかがとても重要だと思います。

「イ.まあまあ意義があった」と答えた理由

- ・多様な話を聞くことができた。
- ・教養教育の現状を大まかに知ることができた。
- ・限られた時間ではあったが、現在の状況について知ることができた。
- ・教養の状況が少しわかったが、情報処理等の他の科目の状況も知りたかった。
- ・第Ⅱ部は他の部会、先生方の取り組み(実践)、状況、課題などがわかって役に立ちました。第Ⅰ部は少し話がぼやけていたように感じます。
- ・近い意味で意見交換を聞けて、次の講義で取り入れやすい取り組み内容が多かった。今後のあり方を改めたい。
- ・少し時間がタイトだった。
- ・初めての参加でもあり、いろいろと勉強になりました。

「エ.あまり意義がなかった」と答えた理由

- ・富山大学として「どうしたいのか」を示すべき。ブレインストーミングしても仕方がない。手段や方法は目的ではない。みんなでも話まとまりにくいので、WGである程度の方向性を決めておいてほしい。「学生が何を学ぶかは自由」って、学生さんは1年生です。そんな彼らを放牧みたいにしても良いのか？まず動機が必要で、少なくともそれだけは示さないといけない。

5. 今後、「教養教育院FDで取り上げてほしい」とお考えの「テーマ」があれば、御記入ください。

- ・ 多人数講義について/学生が作れる授業の必要性
- ・ 教養分離と教養教育院(組織のあり方, 人事制度, 教養専門継続等)
- ・ 分野別評価と教養教育(上記と関連するが, 薬・工・医・看等で分野別評価が導入されており教養教育領域も評価対象であり今までより上の連携が重要と考えています。
- ・ 各部会の課題の現状報告, 可能な連携改善に向けての討論があるといいと思います。
- ・ 全学のレベル別英語コミュニケーション力UPの取り組み, e-learningの活用などについて。
- ・ 全学で取り組むPBL型の授業について
- ・ このようなFDを続けてやっていく必要があると思いました。
- ・ そもそも「教養教育」とは何か? 本学は「教養」をどうとらえているのかを明らかにする必要はないでしょうか?
- ・ プレースメントテストを行った上での厳密なレベル別授業(特に英語)の可能性について
- ・ 学位のシステムが複雑すぎるので学生から見た単位の申請や取得方法を教員に説明してもらいたい。
- ・ ディプロマポリシーと学生の興味・関心成長の統合をめざす授業の工夫
- ・ 基本的なシステムについての議論が多いが, 学生のアンケートなどを基にして, 教育の内容についても取り上げてほしい。
- ・ 学生参加型FD
- ・ 設備改善について

6. 「教養教育院FD2018」について、御意見があれば自由に御記入ください。

- ・ 良い取り組みで、ぜひ毎年お続けください。
- ・ 1年で行っている全学の学生と一緒に3年や大学院でも行えると良いのでは。
- ・ グループ討議形式は毎回あってもいいと感じましたが
- ・ 全体でのFDもいいですが、部会でのFDもすべき。「時間がない」「別のFDも出たいので」、「部会ごと別枠でやったほうがいろんな人と出れるのに」という声もありました。
- ・ グループ討議のAとBは別の教室にしてほしかった。
- ・ 少し時間が長すぎるので短くしてもらいたい。
- ・ 授業参観
- ・ お疲れ様でした。
- ・ 時間が短すぎでした。
- ・ 今後のあり方について討論しているのに、まとめでは個人の期待を述べられた。期待や指針ではなくて「どうしていくのか」を筋に話を持っていかないとこのFDに意味はあるのだろうか?
- ・ 富山大学へ入ることの目的を持たない学生が多いことが問題です。そもそも論で、入試のミスで教養教育が尻拭いしているように思える。大学の魅力を高校生に伝えられていないことが問題。

平成 30 年度富山大学教養教育院 FD2018 報告書

教養教育院教育改善検討ワーキンググループ

WG座長：谷井 一郎

杉森 保

谷口 美樹

福田 翔

水谷 秀樹